

科 目	学 部	学 科	専攻・コース	
小論文	看護学部	看護学科	—	
受験番号	氏 名			採 点

以下の文章を読み、設問に答えなさい。

もともと、ニートやフリーターの人が幸せかどうか、それは別の問題です。

どうも現状に満足しておらず、何かを求めている人が多いらしい。それで調査すると、働かないのは「自分に合った仕事を探しているから」という理由を挙げる人が一番多いという。

これがおかしい。二十歳やそこらで自分なんかわかるはずがありません。中身は、空っぽなのです。

仕事というのは、社会に空いた穴です。道に穴が空いていた。そのまま放っておくとみんなが転んで困るから、そこを埋めてみる。とにかく目の前の穴を埋める。それが仕事というものであって、自分に合った穴が空いているはずだなんて、ふざけたことを考えるんじゃない、と言いたくなります。

仕事は自分に合っていないくて当たり前です。私は長年解剖をやっていました。その頃の仕事には、死体を引き取り、研究室で解剖し、それをお骨にして遺族に返すまで全部含まれています。そのどこが私に合った仕事なのでしょう。そんなことに合っている人間、生れ付き解剖向きの人間なんているはずがありません。

そうではなくて、解剖という仕事が社会に必要である。とにかくそういう穴がある。だからそれを埋めたということです。何でこんなしんどい、辛気臭いことをやらなきゃいけないのかと思うこともあるけれど、それをやっていれば給料をもらえた。それは社会が大学を通して給料を私にくれたわけです。

生きている患者さんを診なくていいというのも、解剖に向かった大きな理由です。一番助かったのは、もうこれ以上患者が死なないということ。その点だけは絶対に安心でした。人殺しをする心配がないからです。しかし患者さんを診るという行為から逃げ出しても、遺族の面倒だとか何かとか実はもっと大変なことがありました。

社会、仕事というのはこういうものです。いいところもあれば悪いところもある。患者の面倒の代わりに遺族の面倒を見る。全部合わせてゼロになればよしとする。

あとは目の前の穴を埋めていれば給料をくれる。仕事とはそもそもそういうものだと思っていけば、「自分にあった仕事」などという馬鹿な考え方をする必要もないはずです。NHKの「プロジェクトX」に登場するサラリーマンも、入社当初から大志を抱いていた人ばかりではないでしょう。

合うとか合わないとかいうよりも大切なのは、いったん引き受けたら半端な仕事をしてはいけないということです。一から十までやらなくてはいけない。それをやっていくうちに自分の考えが変わっていく。自分自身が育っていく。そういうふうに仕事をやりなさいよということが結論です。

(中略)

死体の扱いというのは、結構面倒臭いものなのです。クレームをつけられてはいけません。こじれたら大変なトラブルになる可能性があります。その結果、解剖ができなくなったこともあります。田舎から抗議に来て、兄弟が解剖されるなんて聞いていないという。東京にいる嫁と息子が勝手にやったことで、俺たちは知らないという抗議です。

もちろん法律上は相続と同じですから、嫁と息子に権利があるわけです。しかしそれが通じない。田舎の親戚が集合して、全員がふろしき包みを手にして抗議してくるわけです。こういうことへの対応は面倒くさいから皆嫌がります。でも私は自分でやらなくてはいけないと思いました。

なぜなら死体が一番大切な商売相手です。その一番大事な相手について起こってくる問題は全部自分で片づけていかなくては、仕事をやったことにならないじゃないかと考えたのです。そういうところは人にやってもらって、自分がやりたいところだけ自分がやるというのは、これは自分のためにならない。

(中略)

科 目	学 部	学 科	専攻・コース	
小論文	看護学部	看護学科	—	
受験番号		氏 名		採 点

抗議の相手のような仕事を、ひとによっては雑用と呼ぶのでしょう。それを雑用だと思うのは、自分で考えた自分の筋というものがあるからです。しかし①自分の筋があるということは、いいことでもあるけれど、悪いことでもあるのです。

とりあえず一度は雑用をやってみたほうがいいと思います。若いときはいろんなことをやってみることを勧める。ただし、それを雑用だと軽く見て半端にやってはいけない。それでは薬にならないから。

それは仕事の選択そのものについてもそうです。失敗してもいいと思って仕事をしてはいけないのです。だから、逆に嫌な仕事をやるわけです。そもそもやりたくないことだから、モチベーションを強くしなければやれないはずです。

おそらく秀吉以外の者は草履取りを「雑用だ」と思っていたに違いありません。秀吉だけはそれを半端にやらなかった。だから成功したのです。

自分の筋というものととらわれると損をします。自分に対する自分の意見なんて、自分に対する他人の意見よりもはるかに軽いことが多いのです。そんなことに深刻になっているのは、若い証拠です。そういうときなんか、自分はないと思っているのがいい。「私は人の言いなりです」でいいのです。

私も仕事が詰め込まれていると自分なんか主張している暇はありません。主張するのはせいぜいインタビューに答えているときくらいです。あとはベルトコンベアーに乗っているようなものです。チャップリンの映画「モダン・タイムス」みたいなものです。それで別に問題はない。

もちろん流されているときに経験したことが、また何か考えるきっかけになります。そうなることも狙いのひとつなのです。

こっちが意識的に動くのではなくて、引っ張り出されないと経験できないことというものがたしかにある。それがわかっているから言われるとおりにするのです。犬も歩けば棒に当たるかもしれない。

はじめから自分の筋というものを決めてしまい、自分の好みにこだわって仕事を選んでいたら、チャンスが減ってしまいます。そういう気持ちは場合によっては不まじめだとか軽率だととられるかもしれません。しかしある程度軽く動けるくらいにならないと人は使ってくれません。

私も若いときは頭でっかちでした。それが切りかわったのは中年になってからです。

一番、役に立ったのは解剖でやっていた様々なことです。解剖そのものだけでなく、ある程度の管理職的な仕事をしていた。それに育てられたと思います。うまくいこうが、トラブルが起ころうが、自分で責任を持つ。それを続けていくと、ひとりでに大人になってくる。

死体の引き取りをしていた頃、私は助教授でした。当時の教授は「それは助教授の仕事じゃないよ」と言っていました。たしかに他人に任せておけば、そのときは楽だったでしょう。でもそれでは自分のためにならないなと思ったのです。

だから「助教授の仕事じゃないよ」と言われても、うるさいとしか思っていないませんでした。さすがに実際に口に出してうるさいとは言わないものの、腹の中では言っていました。②これはおれの仕事だ、と。

そのとき、はじめて先生から離れて自分の判断で動いたように思います。そしてわたしははじめて自分が大人になったなという気がしたのです。

「超バカの壁」養老孟司 新潮新書より

設問1 二重下線部①について、何故「悪いことでもある」のか、理由を述べなさい。

設問2 二重下線部②について、何故筆者は「これはおれの仕事だ」と思っていたのか、理由を述べなさい。

設問3 あなたの学業や仕事に対する考えについて、筆者の考えと比較しながら述べなさい。(500字以上600字以内)

